

第6部会

『立正安国論』稿了の期日について

関戸 堯海

『立正安国論』は文応元年（一二六〇）七月十六日に宿屋入道最信を取り次ぎとして、鎌倉幕府の前執権の北条時頼に奏進された私的な勘文である。真蹟〔国宝〕は文永六年（一二六九）十二月八日、日蓮が自ら再度筆写したもので、千葉氏の一族の矢木式部大夫胤家が直接依頼して授与され、遠藤右衛門沙弥道正が相承し、帥公日高の時、中山におさめられた。真蹟三十六紙のうち三十五紙が大本山中山法華経寺に格護される。欠失の第二十四紙は、慶長六年（一六〇一）閏十一月六日に、功德院日通が身延所蔵の『立正安国論』（現存しない）によって書写補全した（宮崎英修『日蓮とその弟子』・中尾堯『読み解く立正安国論』等参照）。真蹟の第三十五紙の後半六行と第三十六紙の九行にわたって書かれる『安国論奥書』には「文応元年太歳庚申これを勘う。正嘉に之を始めてより、文応元年に□勘え畢る。去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月廿三日、戌亥の尅の大地震を見て之を勘う。其の後、文応元年太歳庚申七月十六日を以て、宿谷禅門に付して、故最明寺入道殿に奉れり」（定四四二―三頁・真蹟現存・原漢文）とあり、『立正安国論』は、正嘉元年（一二五七）八月二十三日午後九時ごろの大地震を執筆の契機として、文応元年（一二六〇）完成、七月十六日に奏進された。奏進の期日「七月十六日」は『安国論副状』（定四二

一頁・真蹟曾存・原漢文）、『安国論御勘由来』（定四二二頁・真蹟現存・原漢文）にも明示される。

ところで、『日蓮宗年表』（日蓮宗史料編纂会）の文応元年には「〇五月廿六日立正安国論成る（湊祐録）〇全廿八日唱法華題目鈔一卷を著す（縮遺三二二）〇七月十六日立正安国論を幕府へ獻ず（縮遺六〇四・注讃・別統・因譜）」とあり、『小湊誕生寺所蔵日祐筆目録』をみると「立正安国論」一卷文応元年庚申五月廿六日於鎌倉名越（『誕生寺文書』誕生寺、四八頁）と五月二十六日に鎌倉名越で稿了したという記述がある。目録の奥書には「永正九年（一五二二）壬申三月廿八日書之畢備後公日祐（花押）」（同九八頁）とあり、修補裏表紙見返しに「御書日祐上人御筆明治十六年二月十六日不肖子日良入山之砌獻納之永代小湊山之可為什寶者也小湊山六十一世一忍日良印」（同九八頁）とある。備後公日祐については伝未詳。そして『日蓮聖人遺文辞典』歴史篇の「唱法華題目鈔」の項目（浅井円道）には「『南条兵衛七郎殿御書』の真蹟二紙の行間に日興の抄写があり（中略）書末に文応元年太歳庚申五月二十八日於鎌倉名越書畢とあり、同年七月一六日に上奏された『立正安国論』の稿了は五月二六日（小湊誕生寺所蔵日祐筆目録）とされるから、本書は殆ど同時の製作であり、姉妹編と見ることが出来る」（五五九頁）とあるなど、日付・執筆地の記述として着目されている（寺尾英智「小湊山史の散策」こみなと五六一号）。

日蓮は正嘉二年（一二五八）のころ経蔵（本山岩本実相寺）に入り、一切経を閲読したと伝える。建治元年（一二七五）の

『強仁状御返事』に「仍て予、正嘉・文永二ヶ年の大地震と大長星とに驚て、一切経を開き見るに、此の国の中に前代未起の二難あるべし。いわゆる自他返逼の両難なり」(定一一二二頁・真蹟現存・原漢文)とあり、日蓮滅後四十〜五十年頃の成立とされる『法華本門宗要抄』に「日蓮此の事を見て駿河の国岩本の経蔵に容り諸経論を引て之を勘う」(定二一六〇頁・原漢文)とある。この経蔵には智証大師円珍が唐より請来した一切経があつたとされ、ここで伯耆房日興が入門したという。

以上から、正嘉元年の鎌倉大地震を契機として岩本実相寺の経蔵に入り、鎌倉の草庵と行き来して、文応元年に『立正安国論』を書き上げたと推測できる。そして、七月十六日に奏進された。また、五月二十六日稿了という宗門の所伝があることを紹介しておきたい。

西田の場所的論理とカントの対象論理

——妥当ということ——

岡 廣 二

西田の場所的論理は通常の対象論理とその立場を異にする。対象論理が主客相対からなる論理であるとすれば、場所的論理は主客合一からなる論理なのである。この場所的論理から見れば、カントの「コペルニクスの転回」を証示する「純粹悟性概念の超越論的演繹」は問題と思われるのである。カントは形而

上學の再建には経験に依存しない純粹な綜合判斷が必須であると考え、その範例を純粹自然科学上の實驗的手法に見出した。即ちカントは直観の多様を主観内在のカテゴリーの下に綜合し諸表象との結合によつて客觀的对象は認識され、法則的規定が可能となると考えたのである。そして純粹な綜合判斷は普遍的・必然的でなければならぬから、カテゴリーは経験に由来しない経験に先立つアプリアリなものではないと主張したのであつた。アプリアリとは悟性が恣意的経験からではなく悟性自身から根源的に獲得したものの意味である。ところで、場所的論理はすべてのものが純粹経験から成り立ち、直接経験から生成せるものと見る。従つてカテゴリーもその例外ではありえず、純粹経験即ち「意識するということとはとにかく範疇的『有』以前になければならぬ」とするのである。カテゴリーはいわば「考えられたもの」であり「有」であつて、純粹経験の自己展開の一結果に過ぎない。それは決して「根源的獲得」ではなく過程的・派生的なものなのである。カントはカテゴリーがなぜ客觀的に妥当するのかの演繹に苦労したが、それは真實在の次元に立脚せずして派生的境位から考究しているからである。端的に云つてその考えかたが対象論理であるからカテゴリーの妥当性が問題となつたのである。カントの立場は「認識論的主觀主義」と云われているが、「コペルニクスの転回」も客觀に従う主觀ではなく逆に客觀を構成する主觀の謂いなのであるから、その思惟的變革が主客對立を前提としていることは自明である。これに対し場所的論理は主客相対ではなく、その手前の主客未分を立脚地としてそこから主と客への分